

## 平成 28 年度第 1 回北海道大学次世代大学力強化推進会議 国際分科会 議事要旨

日時 平成 28 年 5 月 20 日 (金) 14:00~16:00

場所 北海道大学事務局 1F 第 1 会議室 A

出席者 (学外委員)

井上, 加藤 の各委員

出席者 (学内委員)

上田 (議長), 三上, 新田, 徳久 の各委員

出席者合計6名

陪席者

山口 (総長), 松島, 小池, 寺尾, 長野, 川野辺, 島, 坂本

計8名

欠席委員

ヴィーツォレック, カセム, 薮 の各委員

計3名

(以上, 敬称略)

### 出席者確認 (資料 1)

議長より, 資料 1 に基づき, 委員及び交代委員, 陪席者の紹介, ならびに欠席委員の報告が行われた。続いて, HUCI 統括事務室より配布資料の確認が行われた。

### 前回議事要旨の確認 (資料 2)

議長より, 資料 2 に基づき, 平成 28 年 2 月 19 日の議事要旨について説明が行われた後, 了承された。

### 報告 1 国際競争力 PF の取組について (資料 3)

大学力強化推進本部研究推進ハブ URA ステーションの岡田主任 URA 及び創成研究機構研究支援室のゴータム准教授より, 資料 3 に基づき, 国際競争力 PF の取組について説明が行われた。その後, 次の意見及び質疑応答があった。

- ・ **Reputation** や論文の被引用件数ということは, ランキングは結局やはり研究力で決まるのか。例えば大学の機能には教育あるいは産学連携などといった機能もあるかと思うが, そういうところはあまり評価されないのか。  
→ **Reputation** は, 本学の教育研究, あるいは産学連携を含めた総合的な力というものによって知名度が上がっていくのだと私は思っている。例えば, 国際的な研究の教育

の連携で優れている、非常に国際的な企業と連携して研究を行っているとなると、必ずしも論文の引用数に出てこない部分でも、世界の研究者の方への知名度に影響してくるものである。そういう意味の総合力として、この **Reputation** はあるのではないかと考えており、教育、産学連携というものも非常に重要だと思っている。

→ 被引用数は直接的には研究の成果であるが、これには教育や産学連携も密接に関わってくると考えている。優れた研究を行うには、世界から優れた大学院生に来ていただかなければならない。これを実施するには、国際的な教育の実施や国際的な教育連携ということが非常に重要になってくる。

→ 研究というのは産学連携が非常に重要な要素で、実用化されることによってまた新たな基礎研究が本学で生まれてくるといった非常に絡み合ったものである。指標で見れば一見研究しかみていないように読めるが、教育、国際化、産学連携もこういったランキングに非常に重要な要素であると考えている。

・ これがアメリカや欧州の論文となると、その **Reputation** を上げるには例えば NSF や NIH など非常に強いファンディングエージェンシー(FA)への働きかけが必要であろうかと思う。そういうところとの交流やコンタクトはどのようにお取りになっておられるのか。学部別、あるいはその中の学科別、あるいはその中のどの先生の論文というものが引用されているのか、そこら辺のところまで分析をされておられるのか。つまり、そういうところをさらに伸ばすために積極的にいろいろな交渉をしていくのか。

→ 本学の研究者単位で「どの先生が非常に有力であるか」ということに関しては、まさに今そういったデータを昨年度1年かけて、研究者別、部局別のデータが整備されたところである。今後は分析を重ね、具体的な本学の強みの形成といった施策に結び付けていきたい。

→ FA への働きかけはまだこれから。海外からの研究費の受入に関しては、URA が様々なサポートを行うように進めており、ご指摘の海外 FA への積極的な働きかけを今後ぜひ行っていきたい。

・ 論文誌の編集部、エディターがどういう人なのかということに分析は及んでいるのか。

→ エディターとの関係、あるいは NSF などのファンディングとの関係は本学は足りていない。例えば、本学の論文執筆研修などでは、論文誌のエディター経験者を講師としてお招きするといった取り組みは行っている。

#### 議題 1 IAU 国際外部評価における自己評価案について (資料 4)

国際本部の武村国際オフィサーより、資料 4 に基づき、IAU 国際外部評価における自己評価案について説明が行われた。その後、次の意見及び質疑応答があった。

・ IAU とのダイアログがこれによって進み、かつこれを作成する過程で学内のさまざまな意見調整がなされる。その 2 つの狙いを持っている。そういうことでよろしいか。

- そうである。
- ・ 定められたフォーマットはあるのか。
  - IAU はガイドラインをもっており、「こういった形で自己評価をするように」というものがある。今回は ISAS の 2 回目ということもあり、どのような事業がどういう観点で行われているのかといった、向こうからのリクエストに対して状況報告も加えて横断的に読み込んだときどんなよい点と課題が見えてくるかといった、一段深掘りの工夫をしている。
- ・ 第 3 章 Good practices で、何をもって Good とするかという基準は、HUCI の掲げる計画の進捗でよろしいか。
  - その通りである。10 年後の姿を一つのゴールとして捉えていることから、計画全体が一本の道になっているかということと、criteria として数値目標があるので、その数値目標をクリアできる見込みかということはあるかと思う。HUCI は始まってまだ 2 年ということもあり、いまの達成度を注目するよりも、その周辺で一体何が起きているのか生の声から拾っていくことを今回は優先している。
- ・ Appendix その他で生の声が出されること、学内の共通意識が認識されるのは非常に素晴らしいことだと思うので、IAU 側にも実態を知っていただく上で非常にいい。抽象度を高めずに、あえてこのまま出されることは素晴らしい。
- ・ 最終的に、全体的な大学のマネジメントとしてどう思っているのかという conclusion が要る気がするので、それを意識されてこれからご準備なさったほうがいい。
- ・ 世界ランキング向上のための戦略と施策とこの self-evaluation は、あまりかみ合っていない気がする。それは最終的な結論のところでお書きになるのかもしれないが、そこが実はものすごく大事な点なのではないのか。
- ・ ランキングであるが、あれは Top10 が全部、英語圏。圧倒的な英語圏バイアスがある。その中でもランキングを上げる努力をするというのは重要だと思うが、そういった構造に対応すると同時に、例えばドイツとフランスに恐らくいい大学があるに違いないがここには入っていないといった、国としての戦略を考える必要があるのではないか。
  - リサーチ・ユニバーシティは毎月集まって会議をしているので、ぜひ働きかけができるといい。
- ・ Self-evaluation 最後の「座談会」など面白いと思うが、みんな事務局ばかり。教官の人たちはこの self-evaluation に対してどう思うか。
  - 座談会の対象は職員だけではない。教官と学生も間もなく開催する予定である。
  - ランキング対策と全体との整合性については、HUCI そのものは大学の国際化で、当然 100 位以内に入るということも大事なもののだが、それだけでは勝てないという部分もあり、いま指摘された部分も注意して、視点の中に入れていきたいと思う。

## 議題 2 海外拠点の展開について (資料 5)

寺尾副学長より、資料 5 に基づき、北海道大学海外オフィスについて説明が行われた。その後、次の意見及び質疑応答があった。

- ・ JICA は海外事務所が多くお察しするところであるが、ほとんどの海外オフィスは所長お一人+α という感じで一つ一つが小さい。私どもの経験では、小さい事務所はなかなか身動きが取れなくて、所長が何でもやることになりかねないので、やられるからにはそれなりのミニマムの体制があってもいいのではないか。
- ・ 「どこに配置するか」という戦略の問題で、ASEAN は非常に納得感があるが、北米に開いてどう開拓しようとしていらっしゃるのか。他の地域、これから人口も増え、所得も増えていくであろう国に着手することとの比較において、どういう戦略的優位性があるとお考えか。
  - 留学生のリクルーティングや情報を素早く入れてくるという意味では、開設済みの海外オフィスが非常に大きく機能してくると思っており、今後 ASEAN オフィスもぜひ必要と考えている。
  - 北米オフィスについては、リクルーティングというよりも、アメリカの大学の教育システム、研究やランキングなどに対する情報収集や FA などへの働きかけといった機能が重点的になるだろうと思っている。
  - なぜ北米かについて、われわれがいわばラーニング・サテライト(LS)でやるときにお手本とする大学がたくさんあるということもある。留学先として北米はアメリカもカナダも非常にポピュラーな場所である。ところが、留学先としてやはり実際に行く人の数があまり増えない理由の一つとして、協定校が少ないということがある。アメリカの大学は学費が高いので、お互いに協定校にすると、学費不徴収にしなければいけない。そうすると、北大の学費よりも向こうのほうがずっと高いので、いわば向こうが見かけ上少し損したような感じにもなる。
  - アメリカ、カナダにあると、その(海外)オフィスの周り、オフィスは大学の中にあるケースも多いので、もしそうなればそういうところに行く、あるいはその周辺で開拓して LS を行うことで、留学先の開拓という意味もあるかと考えている。
- ・ オフィスに限らず、いろいろな大学なども分校を出している。先週ルワンダに行ったのだが、復興の歩みが非常に早く、カーネギーメロン大学が分校を出していた。先ほど LS という話があったが、例えばある学部についてはサテライトスクールを設けるというような方向性を指向していらっしゃるのかどうか。
  - 分校はなかなか難しいが、大きなオフィスも、正直いって今の予算状況でこういう数のオフィスを出すというのは北大としては事実上かなり難しい。もしそれをやるとなれば、出す数を少なくするとか、そういうことをせざるを得ない。もっと上の判断

で、オフィスで取り組みをやるということであればだが、このくらいの陣容が身の丈かと思っている。

→ 今の LS は、研究者が外に出て、相手大学と協力して北大の授業をする北大として単位を出すという教育システムの仕組み。こういった形でいろいろな教育のための、試行錯誤しながら、いま前に行っているところである。

- ・ 海外オフィスは何のためにあるのか。日本の経済が伸びていたとき銀行なども海外事務所を作ったが、そのときの状況によって海外事務所というものは立ち位置が変わる。
- ・ 北大を伝えること、北大への期待をオン・ザ・スポットで收拾することがまず一つ大きい。そして情報の収集・分析、あるいはそれぞれのオフィスからの意見具申をヘッドクォーターにおいて、どういうふうにしてそれを聞いて対応していくのか。海外オフィスと北大の本部は、そういう意味で対話の関係にあるのではないか。誰を海外オフィスに出すのか、その人選も実はかなり難しく、色々な人を良いところに出すことが大事だと思う。
- ・ 例えばルサカオフィスが、現地の医学や獣医などで貢献するとなると「日本の北大はここでこんなことを頑張っているのか」と分かれば、ひいては先ほどの **Reputation** につながると思う。研究に限らず、そういった途上国の問題、大きな世界的な諸課題をなんとか助けたいということ、北大の **Reputation** が上がるのではないか。なぜ大村先生が今年ノーベル賞を取ったのか。やはりあそこはああいう伝染病に対応してやったということが評価されたと思う。勝負の場は、スウェーデンではないし、ジャーナルではない。実はその現場において日本の北大の人たちがどういう貢献をしているのかということをもっと伝えることが、非常に大きな **Reputation** の要素なのではないかと私は思う。その視点で、海外オフィスの性格を整理されるといいのではないか。
- ・ 交流デーというのがたくさんあるが、もう少し先ほどの世界の諸課題に対応してこういう研究をやっているというのをお示しになるようなデーにしたほうが、よりいいのではないかという感じがする。
  - 「交流デー」という名前が確かによくはない部分もある。例えば、ヘルシンキオフィスがやった内容はブレーメン大学、ゲント大学は、両方とも学生の説明よりむしろ共同シンポジウムであった。交流というのは、研究交流という意味である。学生の説明だけというケースもあるが逆のケースもあり、ジョイントシンポジウムが主という交流デーもある。そういうものをどんどん増やしていき、北大の研究力というものを知ってもらおうということは非常に重要なことだと思っている。
- ・ 北大というよりむしろ日本の大学全体で考えなければならないと思うが、例えばバンコクの話の聞いただろうか。日本の 40 大学が出ているという。学生のオフィスもある。役割分担というのか **Value for Money** の観点から、どこに効果的に効率的に投資できるか、その中で北大はどこの部分を担ったらいいかという議論もあってしかるべきではないか。
  - なぜ北米かについて、われわれがいわば LS でやるときにお手本とする大学がたくさんあるということもある。留学先として北米はアメリカもカナダも非常にポピュラー

な場所である。ところが、留学先としてやはり実際に行く人の数があまり増えない理由の一つとして、協定校が少ないということがある。アメリカの大学は学費が高いので、お互いに協定校にすると、学費不徴収にしなければいけない。そうすると、北大の学費よりも向こうのほうがずっと高いので、いわば向こうが見かけ上少し損したような感じにもなる。

- アメリカ、カナダにあると、その（海外）オフィスの周り、オフィスは大学の中にあるケースも多いので、もしそうなればそういうところに行く、あるいはその周辺で開拓してLSを行うことで、留学先の開拓という意味もあるかと考えている。

### 議題3 日本人学生派遣数の増加策について ～派遣プログラム群の構造～（資料6）

国際本部国際教務課の石黒専門員より、資料6に基づき、日本人学生派遣数の増加策について説明が行われた。その後、次の意見及び質疑応答があった。

- ・ 大変頑張っているらしい、いいことだと思う。やはり学生が大いにいろいろな経験を短くても長くてもいいから積んでおくということは大事なこと。
- ・ 日本語能力試験では日本で受けるのが20万人で、外国で受けているのが40万人くらい。去年と一昨年を比較すると、日本にいる外国人の受験は26パーセント増である。今年年間を通すと35パーセントくらい増えるのではないか。それだけ日本にいろいろな人がやってきて、日本語を勉強して試験を受けているわけである。
- ・ 企業も随分国際展開しているから、やはり大学生のときから短くても長くても、ちょっとだけよコースでもいいから行っておくといいのではないかと思う。

### 議題4 次回の開催日程について

議長より、全体会となる次回日程について、7月4日を予定しており、国際分科会と研究分科会を合同で開催する旨が説明された。

最後に活発な意見へのお礼が述べられた。

以上